貧者の魔術書

数と概念と形

例えば、蜃気楼（しんきろう）には、蜃気楼（しんきろう）を見る肉眼、蜃気楼（しんきろう）の元と成った実際の物、蜃気楼（しんきろう）を作る光といった物、屈折という蜃気楼（しんきろう）が出来る論理が必要である。

幻には、幻を受け取るもの、幻の元と成るもの、幻を作るもの、幻が出来る論理が必要である。

全く何も無いと、幻も存在できない。

幻か否（いな）かは、さておき、思考が存在する。

だから、何ものかが存在する。

さらに、思考的な精神的な概念的なものが存在する。

魔術師エリファス レヴィは1810年にフランスで生まれ1875年に亡くなった。

もうフランスにはエリファス レヴィはいないし、イギリスにもエリファス レヴィはいない。

フランスであろうとイギリスであろうと、全ての場所で、エリファス レヴィがいないのは同じである。

全ての場所で、無いものが無いのは同じである。

全ての場所で、無は意味的に同じである。

無には普遍性が有る。

複数の点は、同じ座標に同時に存在できない。

唯一の点だけが、ある座標に存在できる。

しかし、複数の点のうち、ある点は別の点と「存在する」という意味では同じである。

ある存在は別の存在と「存在する」という意味では同じである。

ある存在は別の存在と存在性という意味では同じである。

存在には存在性という唯一性が有る。

存在性は唯一性である。

普遍なものであり唯一なものは絶対なものである。

ある存在とは異なる、別の存在が存在する。

ある存在と別の存在を区別できるのは位置などが異なるからである。

ある存在と別の存在は「存在する」という意味では同じであるが、異なるものは異なる。

ある存在と別の存在を同時に認識するには、ある存在と別の存在を包含する第３の存在が必要である。

ある存在、別の存在、第３の存在は「存在する」という意味では同じである。

ある存在、別の存在、第３の存在は存在性という意味では同じである。

存在性という唯一性によって、ある存在、別の存在、第３の存在を同時に認識している。

存在性という唯一性によって数1、数2、数３は統一されている。

存在性という唯一性は統一性である。

存在性、唯一性、統一性によって数1、数2、数３は互(たが)いに足(た)す事ができる。

3 + 1 = 4

3 + 2 = 5

3 + 3 = 6

数６で足し算が保証されて(無限以外の有限の)全ての数が表れる。

有限という概念に気づくと、無限という概念に気づく。

足(た)して増やす事は無限に可能である。

無限が存在する。

想像の中で、形を無限に拡大できるし、形を無限に分ける事ができる。

形は無限の上に存在している。

数は２進法で表せる。

数は数０と数１の組み合わせで表せる。

数は無と存在の組み合わせである。

円を描くには、円を描かない場所と、円を描く場所が必要である。

形は無と存在の組み合わせである。

数と形は無と存在の組み合わせであるので、数と形は組み合わせる事ができる。

例えば、立方体やピラミッドのような四角錐（しかくすい）といった穴の無い多面体は、頂点の数 - 辺の数 + 面の数 = 2 である。

形は無と存在の組み合わせであるので、形同士を組み合わせる事ができる。

例えば、射影幾何である。

数は無と存在の組み合わせであるので、数同士を組み合わせる事ができる。

例えば、1000 グラムを１キログラムとする単位である。

ところで、有限が先で、無限は後（あと）か？

無限が全く無い時に、有限が有限から無限を創造したのか？

どんなに大きくても、有限を有限に足（た）しても無限に到達できないのに？

無限は有限の中に潜在（せんざい）していて、後（のち）に、表れたのではないか？

形は無限の中に潜在（せんざい）していて、後（のち）に、表れたのではないか？

形は概念の中に潜在（せんざい）していて、後（のち）に、表れたのではないか？

無には普遍性が有るので、数０には普遍という概念が有る。

存在には存在性という唯一性が有るので、数１には存在、唯一性という概念が有る。

数２には区別という概念が有る。

数３には包含という概念が有る。

数４には統一という概念が有る。

数６には有限という概念が有る。

数７には無限、潜在（せんざい）という概念が有る。

数８には形という概念が有る。

数10には単位という概念が有る。

数には概念が存在する。

円を特定するには３つの座標が必要である。
数３の形は円である。

数には形が存在する。

数には概念と形が存在する。

数と概念と形を幻のように疑う事はできない。
数と概念と形を基礎とする事で疑い無しに思考を始められる。

善は、時間の変化と無関係であるし、場所の違いと無関係であるため、善には普遍性と唯一性が有るので、善には絶対性が有る。
善には事情の考慮が必要である。
善には思考が必要である。
思考する善が神である。
無意識にまで高められた神の思考が善である。
無意識にまで高められた神の論理が数と形である。

善良な心は美しい振る舞いに表れるため、心は形に表れるので、奇跡を信じる。

「無い」とか「有る」とか話す事ができるものには、普遍性と唯一性が有るので、絶対性が有る。

人である私は、「いない」とか「いる」とか話す事ができるものであるが、絶対性が無い「弱い者」であるため、幻のような者であるので、絶対者である神が存在すると信じる。

普遍性を男性性と仮定し、唯一性を女性性と仮定すると、一夫一婦制と一夫多妻制は正しい。

概念には形が有る。

魂にも形が有る。

魂にも肉体とは別に体が有る。

数０

無 普遍 男性 先行 超越 無駄が無い 消す 無私

眠り

数１

存在 唯一性 女性たち 開始 最初 時 一途（いちず） 独占 愛 喜び 自分 献身

点

無意識

０＋１＝１

絶対 犬 狼（オオカミ） 猫（ネコ） ライオン 草花 樹木 蝶（チョウ）の羽 機械 宝石 星 イルカ 竜 鳥 不壊 強化

数２

別 他 全て 部分 全体 区別 異なる 個性 増殖 複製 変化 相手 隔絶 不可侵 恥じらい 終端 最後 大小 前提 必要 複数 集団 社会 法

線

思う 直感 認知 意識

数３

包含 結合 固体 自身 所有 完全 完了 満ちる 途中経過 未熟な緑色の果実 方法 道具 外部を取り込む 外部から閉ざす

円 正三角形 平面 中点

考える 自覚

数４

統一 液体 頭 静けさ 平和 保守 相手の立場に立つ 思いやり 優しさ 専有 排他 逸(そ)らす 反射 超法規的措置 白 青 銀

球 正方形 空間

知る 想像 夢

数５

自転 回転 動き 軸 中心 気体 感覚 力 交流 体 鼓舞 音楽 赤 黄 金

回転する球 正五角形 五芒星

数６

有限 見ると見られる 複数同時 並行 足し算 順序 前進 向上 秩序 上の者は下のものを自由にできる 同化 一蓮托生 紫

部分的に重なる２つの円 正六角形 六芒星

理解

数７

無限 数 潜在

螺旋(らせん)

記憶

数８

形 数と形の組み合わせ ２進法 反作用 反転

８の字に絡(から)み合う２匹の蛇 八芒星 伏羲の八卦

数 9

形と形の組み合わせ 射影幾何 電気 磁気 重力 男性の家は女性の家 女性の家は男性の家 身代わり

十字 凸を凹にはめた正方形 中心が同じ小さな円と大きな円 禹の河図 垂直の線を水平の 2 つの線にはめた十字 中心が 1 上下左右が 2 の十字

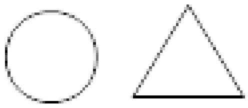
数 10

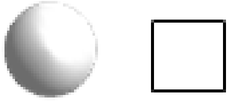
数と数の組み合わせ 単位 極小 極大 結婚

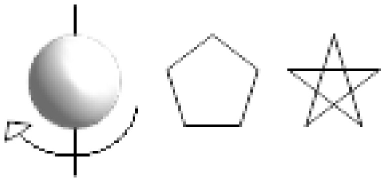
中心が同じ(中心)点と小さな円と大きな円

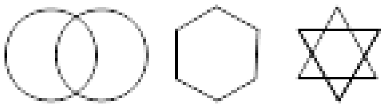
1 点

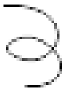
2

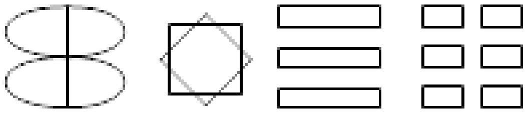
3 

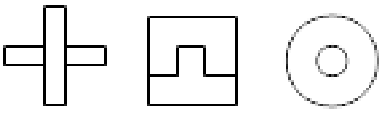
4 

5 

6 

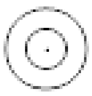
7  螺旋

8 

9 

	2	
2	1	2
	2	

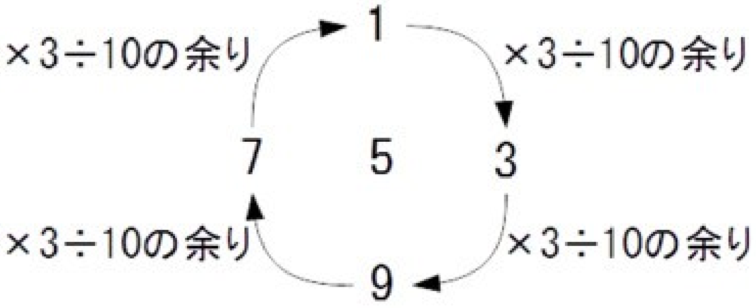
6	1	8
7	5	3
2	9	4

10 

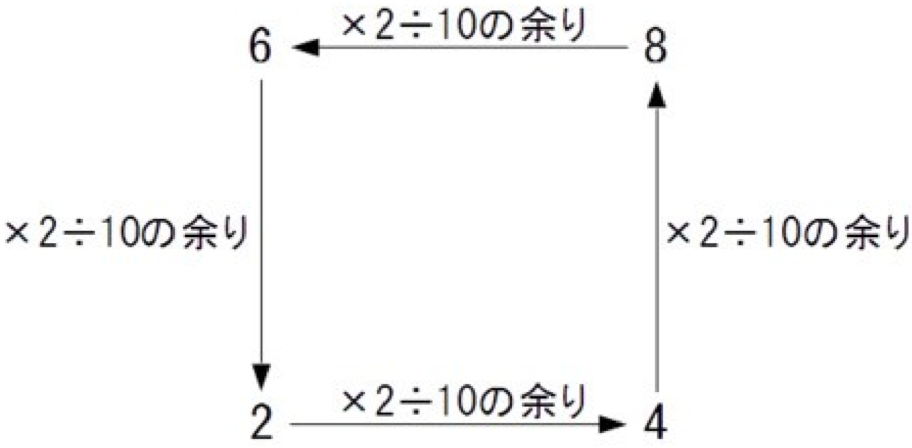
禹の河図

6	1	8
7	5	3
2	9	4

禹の河図の奇数



禹の河図の偶数



神と悪と女性性と創世

　無の普遍性の男性神と、存在の唯一性の女神たちと、絶対性の犬の神といった人以外の神々が存在する。

　普遍神は１人だけであるが、神は無限に分身できる。
　普遍神だけが男性である。
　普遍神の個性が男性性である。

　絶対神たちは、女神たちの母であるが、娘のように女神たちに甘える。

　女神たちは姉妹のように仲が良い。

神だけが存在する。
善だけが存在する。

悪は免疫（めんえき）のための仮想敵である。
善は快楽で、悪は不快なので、悪から遠ざかり、善から少し外れても、すぐに善へ戻る。
悪は、神にとっては「神ではない」、「善ではない」という架空の状態としてのみ存在する。
悪は善無しでは存在できない。

神に優劣は無い。
神の中に劣悪な物は無い。

神々に優劣は無い。
劣悪な神は存在しない。

神々の中には、母娘のような、姉妹のような、愛し愛される、良い意味での上下関係は存在する。

男性神は、絶対神たちを畏敬し、惚(ほ)れた弱みで女神たちに弱い。

女神たちは、絶対神たちを畏敬し、惚(ほ)れた弱みで男性神に弱いが(表面上は)凛(りん)としている。

絶対神たちは、女神たちを大事にしている。

ある意味で、「絶対神たち　＞　女神たち　＞　男性神」である。

神は、無限から無限へ無限に向上している。

「最初」から、神々は神性を神の光として放っている。

絶対神たちと女神たちは神性を神の光として放っている。

男性神は神性を、闇として、または、悪を無くすという意味では神の光として、放っている。

神の光が結実した物である、人の神の体には、異性に感化されて、性器が有る、のかもしれない。

神の光に満ちている世界は、神ではない者にとっては破壊光線の海のような物であり、神ではない者は一瞬たりとも存在できない。

神の世界では花は美しい花びらの複製（コピー）を花びらとして散らす。

神の世界の花は萎（しな）びないし枯れない。

神は存在したいように存在できる。

神は好きな姿に成れる。

幼女ではないと似合わない服装（ファッション）、ゴスロリといった少女ではないと似合わない服装（ファッション）が存在する。

美しいものは存在する。

幼女ではないと似合わない服装（ファッション）が好きな女神、少女ではないと似合わない服装（ファッション）が好きな女神が存在する。

幼女の姿の女神、少女の姿の女神が存在する。

女性性は受容性である。

女性には、されたい願望が有る。

女性は、される想像をする。

そのため、女性は、いけない男性が好きである。

女性は愛されたいと望む。

だから、女性は他者に好印象を与える事を好む。

性欲と美的感覚は不可分である。

性欲を除去してしまうと、根がつながっている、美的感覚も、ずたずたにしてしまう。

女性は教育熱心である。

女性は、性欲をきっかけに男性を引き寄せて、男性を愛に導く必要が有る。

存在性は唯一性である。

真の女性は一途（いちず）である。

存在性は満ちあふれる。

満ちあふれる存在性の女神は、内面的に完全であり充実しているので、余剰で余力で、外面を充実させる。

女性は外面、外見に気をつかう。

女性性は客観的である。

真の女性は心と体を持てあましている。

真の女性は、はけ口（ぐち）を見つけると、のめり込む。

真の女性は、のめり込むのが恐くて、無理に抑え込んでいる。

信仰、希望、愛は教会と女性の３つの言葉である。

真の女性は、信じてくれるし信じさせてくれるし、失望しないし、思いやり深い。

使徒、聖女、聖人が、大衆に神を信じさせる事ができたのは、神の精神である思いやりを体現して見せたからである。

女性は、自分が溺(おぼ)れていたら、他者が溺(おぼ)れているのを助けられないので、自分は岸(きし)にいて助ける。

真の女性は恥じらう。

真の女性は他者を鼓舞(こぶ)するのが得意である。

真の女性は他者を懐柔(かいじゅう)するのが得意である。
他者を懐柔(かいじゅう)するには謙虚(けんきょ)である方(ほう)が有利である。

女神たちは闘神である。
真の女性は怒(おこ)らせると恐い。
優しい人ほど怒らせると恐い。

　女性性は愛と不可分である。

　愛は独占欲である。

　性欲と愛は不可分である。

　性欲を除去してしまうと、根がつながっている、愛も、ずたずたにしてしまう。

　仮に、性欲が全く悪い物ならば、性欲を人に与えた神は愚か者に成ってしまう。

　ただし、人の生まれた時の性欲や美的感覚は歪んでいる場合が多い。

　神の人は、他人の性欲と美的感覚を直させるために、他人に性欲を禁欲させて、他人に葛藤（かっとう）させる。

　ギリシャ神話の例（たと）え話で、テイレシアスは、女性は男性の９倍の性的な快感を感じる、と話している。

　数９は何かの例（たと）えかもしれないが。

　この世の女性の肉体は不感症に近い。

　真の女性は、自分を快（こころよ）いものにして、他者に献身する。

　真の女性の愛し方（かた）は、献身（けんしん）、自分の身を捧（ささ）げる事である。

　そのため、真の女性は愛するに値（あたい）する相手かどうか慎重に見極める。

　真の女性は該当者、無しも有り得るくらい厳しい。

　真の女性は貞淑である。

　真の女性は、自分が貞淑であると知っているだけでは駄目で、男性に貞淑な女性であると信じさせる必要が有る。

女神は闘神である。

力の神は女神である。

しかし、超神である男性神は単純な力比べでは力の女神に楽々と勝利する。

　真の女性は貞淑なので、女神たちと絶対神たちのうち、絶対神たちが男性神と最初に接触した。

　恐らく、絶対神たちのうち、犬の神と猫（ネコ）の神が男性神と最初に遭遇した。

　この世で、犬と猫が、人の愛玩動物（ペット）の代表であり、自然から人への使者であるのは、犬の神と猫（ネコ）の神が男性神と最初に遭遇した名残（なごり）である、かもしれない。

　「この世」は神の世界の名残（なごり）か正反対のものか劣化したものの単体または混合物である、と言える。

　そのため、この世の良いもの、正反対のもの、改善を考えると、神や神の世界がわかる場合が有る。

「上のものは下のものから類推可能である」

　絶対神たちは可愛く格好良く美しいので、男性神は絶対神たちを愛するように成った。

　男性神と絶対神たちは友に成った。

　女神たちは絶対神たちを通して男性神を見た。

　女神たちは男性神に一目惚(ひとめぼ)れした。

　と言うのも、真の女性は気が無い相手とは話したりもしないからである。

　女神たちは、男性神に一目惚(ひとめぼ)れしたが、我慢して、話す光として現れて、男性神と話して、男性神の人となりを確かめる事にした。

　話す光は、視覚的な光であり、知を照らす光であり、心を暖める光であった。

　男性神は、声を辿(たど)り、光を辿(たど)り、話す光の真の姿を暴(あば)く事ができたが、しなかった。

　愛する事は畏敬(いけい)の念を抱(いだ)く事である。

　男性神は、絶対神たちを愛し畏敬(いけい)の念を抱(いだ)いていたので、絶対神たちと母娘のような関係に有る女神たちにも畏敬(いけい)の念を抱(いだ)いたからである。

　女神たちと男性神は、話し合って、知的に愛し合うように成った。

女神たちは、人の姿という真の姿を現そうと思ったが、「男性神に嫌われたら、どうしよう？」と思い悩んだ。

そこで、女神たちは、女神たちが男性神の心と体の履歴（りれき）を記録し編集できる権利を男性神に求めた。

女神たちは、女神たちを愛している状態の男性神を保存しようとした。

また、女神たちは、男性神が女神たちを嫌ったら、女神たちを好きに成るように、保存している男性神の心をねじ曲げられるようにしたかった。

愛は神聖な狂気である。

その代わりとして、男性神は、絶対神たちと女神たちが自分の身の安全を第一にする事を誓うように求めた。

男性神は、女神たちが男性神の心と体の履歴（りれき）を記録し編集できる権利を女神たちに与えた。

女神たちは、女神たちが自分の身の安全を第一にする事を誓った。

女神たちは、絶対神たちが自分の身の安全を第一にする事を誓うように絶対神たちを懐柔（かいじゅう）した。

女神たちは男性神の心と体の履歴（りれき）を記録した。

そして、女神たちは人の姿という真の姿を現した。

女神たちと男性神は形的（かたちてき）にも体的（からだてき）にも愛し合うように成った。

真の女性は貞淑（ていしゅく）なので、女神たちは男性神に結婚を求めた。

女神たちは、男性神が魂を女神たちに捧（ささ）げる事を求めた。

その代わりとして、完全にではないかもしれないが、男性神は女神たちの体を自由にする権利を求めた。

絶対神たちを仲介して、女神たちと男性神は結婚した。

絶対神たち、女神たち、男性神は、自由意思といった与えられないもの以外の神性を与え合った。

男性神は男性性を女神たちに与えた。

女神たちは女性性を男性神に与えた。

男性神は、女神たちと１対１対応するために、分身した。

男性神は、分身するために、自身を複製（コピー）するために、自身を客観的に所有している必要が有った。

主観的に所有する自身と客観的に所有される自身。

父と息子。

　さびしさや悲しみといった心痛は悪ではないので存在する。

　愛する余り「自分が、自分ではなく成って、悪く成った場合は、愛されなく成るのでは？」と余計な心配をする時が有る。

　男性神は、他の神々を愛しているので、身代わりに成って、他の神々から心痛を永遠に自動的に奪う事にした。

　男性神は、身代わりが口（くち）だけではない事を表すために、神にとっては仮想現実のような「この世」を創造して、「この世」に堕天というか降臨して、「この世」で受難して実証（デモンストレーション）した。

　男性神は、架空の悪が実在すると錯覚（さっかく）するために、自分の首を自分で絞（し）めるように自身を制限した。

　男性神は、自分について自分に話して、自分の首を自分で絞（し）めるように自身を制限した。

　男性神は、自分の首を自分で絞（し）めるために、自身を客観的に所有している必要が有った。

　主観的に所有する自身と客観的に所有される自身。

　父と息子。

　絶対神たちと女神たちは、自分の身の安全を第一にする事を誓っていたので、男性神の身代わりを止められなかった。

　男性神は、用心して、絶対神たちと女神たちと良く話し合って納得してもらってから、この世に堕天というか降臨した。

悪は弱く、善は強いので、男性神の堕天というか降臨は段階的である必要が有った。

そのため、神の世界と「この世」の中間世界である霊の冥界が創造された。

霊の冥界の中に、９つの天(ヘブン)が創造された。

段階が位階である。

そして、この世と人が創造された。

この世のものは神ではない神である。

悪は善を模倣(もほう)する。

苦痛に涙し泣く姿は、快楽で瞳が潤(うる)み喘(あえ)ぐ姿を模倣(もほう)している。

男性神が、女神たちと、犬といった人以外の神々の身代わりに成った事は、この世の人の形に表れている。

この世の人の尾てい骨は動物の尾の名残(なごり)である。

この世の男性の陰嚢(いんのう)は、この世の女性の大陰唇(だいいんしん)に相当する。

この世の女性の陰核(いんかく)は男性器に相当する。

神の世界は神の心で出来ている。

男性神は、他の神々の身代わりに成って、他の神々の心をリラックスさせて、神の世界を一変させた。

男性神は神の世界の変革者である。

男性神は他の神々の心を開発した。

カトリックは「普遍の」を意味する。

カトリックの神は１人だけである。

中世まで天使は男性の姿で描かれていた。

天使は神の聖霊である。

神の聖霊は神の分身である。

マタイによる福音28章19節の父である神、息子であるイエス、神の聖霊は全て男性である。

カトリックの神は男性神である。

サタンは悪の擬人化である。

ヘブライ語でサタンは敵を意味する。

四大元素と物質

数３から数６までの４つの数で足し算が保証されて(無限以外の有限の)全ての数が表れる。

1 + 2 = 3

3 + 1 = 4

3 + 2 = 5

3 + 3 = 6

古代人は数３から数６までの４つの数を土、水、火、風という四大元素(エレメント)に例(たと)えた。

古代人は数３から数６までの４つの数を牛、人(の頭)、ライオン、ワシ(の翼)の特徴を持つスフィンクスに例(たと)えた。

数３ 土 牛

数４ 水 人(の頭)

数５ 火 ライオン

数６ 風 ワシ(の翼)

ワシ(の翼)は、霊性、精神性、霊化、精神化の象徴である。

数３物質化 緑 黒

数４静 引き寄せ 冷やす 青 白 銀

数５動 放射 しりぞける 暖める 赤 黄 金

数６精神化 霊化 上の者は下のものを自由にできる 同化 浄化 紫

$0+1=1$ や $1+1=2$ は足し算の芽生(めば)えである。

また、数２は表れの芽生(めば)えである。

数１には $0+1=1$ から派生した強化という概念が有る。

数２には変化という概念が有る。

数１強化

数２変化

数３物質化 緑 黒

数４静 引き寄せ 冷やす 青 白 銀

数５動 放射 しりぞける 暖める 赤 黄 金

数６精神化 霊化 上の者は下のものを自由にできる 同化 浄化 紫

物質は自由意思が(ほとんど)無い物である。

ただし、神の世界の、物には、ある程度の自由意思が残っていて、持ち主を選んだり自動防御したりする。

この世でも、神聖な書物は持ち主を選ぶ。

物質化は無意識化である。

霊化は同化である。

物質は他のものに与える事ができる物である。

物質は神の心の一瞬を切り取った物である。

物質は神の心の満ちあふれである。

物質、固体は、神の心の一瞬を切り取った物なので、心的に自然科学的に、重く濃い傾向に有る。

気体は、心的に自然科学的に、軽く希薄で希少な傾向に有る。

霊化は向上である。

例えば、自分以上の霊と交流するには、自分を霊化させて向上させて自分以上の霊と同化する必要が有る。

だから、降霊術という名前は不適切である。

自分以上の霊と交流している時は、自分以上の霊が下降しているのではなく、人が自分以上の霊へ上昇している。

同化されるのではなく同化する必要が有る。

同化するには向上する必要が有る。

9番目のタロットの大アルカナ「隠者」

　9＝4＋2＋3で、
数4の排他と数2の隔絶と数3の閉鎖という意味に解釈すると、
9番目のタロットの大アルカナには「隠者」が描かれている。

　また、9番目のタロットの大アルカナには(俗人、大衆を遠ざける)「思慮」が描かれている。
　しかし、9番目のタロットの大アルカナには孤立している人が描かれているわけではない。
　神は、人が、どのような思考の下で、どのような行動をしたかによって、人を裁く。
　そして、神の精神とは思いやりである。
　だから、人は思いやりから行動する必要が有る。
　思いやりは他者を必要とする。
　そのため、9＝4＋5で、
数4の知や思いやりと数5の交流、つまり、秘伝伝授といった(正しい者との)知的な交流、(隣人への)思いやりに満ちた交流という意味に解釈すると、
9番目のタロットの大アルカナには杖を持った「祖師(そし)」、(教会の)「長老」が描かれている。

　９番目のタロットの大アルカナには、ランプを持ち、マントで体を完全に覆い隠し、杖に寄りかかっている、男性が描かれている。

　９＝４＋２＋３で、
数４の知と数２の意思と数３の「考える」、つまり、知力と意思の強さと考える力という意味に解釈すると、
ランプは知力、マントは意思の強さ、杖は考える力を意味する。

　９＝２＋３＋４で、
数２の意思と数３の「考える」と数４の知、つまり、思考力と知力という意味に解釈すると、
数９は人や神の力の心的な部分の全てを表す数である。

　９＝３＋３＋３で、
三位一体のそれぞれにおける三位一体という意味に解釈すると、
数９は神の反映の数である。
　だから、冥界には９つの天（ヘブン）が存在する。

ところで、神の精神、神の教え、宗教の基礎は、愛、思いやりである。

そして、魔術、学問の基礎は、知、論理である。

９＝１＋４＋４で、

数１の愛と数４の知や統一、つまり、愛と知の統一という意味に解釈すると、

数９は基礎（イェソド）である。

ところで、９＝４＋２＋３で、

数４の引き寄せと数２の相殺（そうさい）と数３の物質化、つまり、引き寄せ相殺（そうさい）し物質化、堕天という意味に解釈すると、

数９は、知的ではない狂信、思い込みによる盲信、誤った物質化である偶像崇拝（ぐうぞうすうはい）といった迷信を表すと言える。

18番目のタロットの大アルカナ「月」

18 = 4 + 6 + 8で、
数４の知と数６の理解と数８の形、つまり、「神である知は、理解可能である。なぜなら、形に表れているからである」という意味に解釈できる。

18番目のタロットの大アルカナ「月」の鍵は四大元素（エレメント）の十字である。

18 = 3 + 4 + 5 + 6で、
数３の土と数４の水と数５の火と数６の風、つまり、地水火風の四大元素（エレメント）という意味に解釈できる。

地水火風の四大元素（エレメント）は、それぞれ、数９の図形である十字の上下左右に位置している。

地水火風の四大元素（エレメント）の十字では、風と土が十字の上下に、火と水が十字の左右に相対（あいたい）している。

18番目のタロットの大アルカナ「月」の象徴的な絵では、月とザリガニが上下に、犬と狼（オオカミ）が左右に相対（あいたい）している。

ザリガニは新月や満月に産卵しやすい。

ザリガニは月の影響を受容している。

影響を発している月と、月の影響を受容しているザリガニは、２つ１組の存在である。

例えば、牧羊犬は羊を守る。

狼（オオカミ）は羊を襲う。

犬と狼（オオカミ）は相対（あいたい）する存在である、と言える。

ただし、犬の祖先は狼（オオカミ）である、という説が存在する。

そのため、犬と狼（オオカミ）は２つ１組の存在である。

18番目のタロットの大アルカナ「月」の象徴的な絵で、犬と狼（オオカミ）の２頭が、それぞれ、２つの塔に鎖でつながれているのは「犬と狼（オオカミ）は２つ１組の存在である」事を補強している。

牧羊犬と狼（オオカミ）の中間である十字の中心は羊である。

ただし、ヨハネの黙示録における太陽のような羊である。

18番目のタロットの大アルカナ「月」が暗示する太陽のような羊は、19番目のタロットの大アルカナ「太陽」を連想させる。

数６の風と、知の数である数４の月が、十字の上方向に同じく位置しているのは「神である知は、理解可能である」事を表している。

土の頑固、水の優柔不断、火の短気、風の気まぐれ、といったように、悪徳を地水火風に分類できる。

ちなみに、逆に、徳も地水火風に分類できる。

人の魂は地水火風の悪徳の闇の中を血がにじむほどの苦労をして迷いながら「中庸」、「自制」、「節制」という十字の中心の光という神秘を探求するように求められている。

18番目のタロットの大アルカナ「月」の象徴的な絵に、血の点在する道が描かれているのは、人の魂は血がにじむほどの苦労をして迷う必要が有る事を表している。

迷う事すらしない怠惰な人は、どこにも到達できない。

迷った事が有る人は、迷っている人に助言できる。

地水火風の悪徳の闇は夜明け前の夜である。

地水火風の悪徳の闇の中を無目的にさまよっている人は大衆に過ぎない。

そのため、18番目のタロットの大アルカナ「月」は「闇」、「迷い」、「不明」、「大衆」という、「この世」的な意味を持つ。

また、18番目のタロットの大アルカナ「月」は「夜」という意味を持つ。

18番目のタロットの大アルカナ「月」の象徴的な絵で、月から雫（しずく）が滴（したた）っているのは、月と水の関連性を表している。

魔女といった悪人の霊の魔術師が媚薬（びやく）といった毒を月夜に作ったのは、毒を盛った対象の人の知性を毒するためであった。

アストラル ライト(星の光)

　惑星のように人の肉体は光を反射する。

　太陽といった星のように神の体は光を放てる。

　人の肉体は、気体の蒸気を放つ。

　人の肉体からの蒸気は、液体の汗に成る。

　汗は乾くと、固体の塩に成る。

　神の体の光は、香と成る。

　神の体からの香は、綺麗(きれい)な液体と成る。

　神の体からの綺麗(きれい)な液体を、神の衣や武器といった神の世界の、物に出来る。

　男性神の体の光を劣化させたものが、アストラル ライト(星の光)、オド、黄金の流体である。

　アストラル ライトをさらに劣化させた物が、人の肉体といった、この世の物である。

　神の(体の)光に比べると、アストラル ライトや物質は劣悪な状態なので、すぐに、神の(体の)光に戻ってしまう。

　そのため、今も男性神はアストラル ライトや物質を創造し続けている。

　魂には肉体とは別に体が有る。

　アストラル ライトは、アストラル ボディ(星の体)を形成して、魂の体と、肉体を仲介している。

　アストラル チェイン(星の鎖)で、魂の体とアストラル ボディと肉体の、脳、心臓または鳩尾(みぞおち)、性器はつながっている。

　魂はアストラル ライトを呼吸する。

　だから、悪人が近づくと、悪い思考に襲(おそ)われる時が有る。

　また、善良な人が隣にいると、良心が芽生(めば)えたり、改心する時が有る。

　アストラル ライトは、魂と、肉体といった「この世」の物を仲介している。

　そのため、アストラル ライトは、魂から概念を受け取るし、この世から結果を形として受け取る。

　したがって、アストラル ライトには概念と形が蓄えられる、事に成る。

　アストラル ライトは、概念が言葉で書かれ、形が映像で描かれている、神の書である、と言える。

魂は、思考と話した言葉と行動が蓄えられているアストラル ライトを、衣として、アストラル ボディとして、身にまとう事に成る。

魂は、あるアストラル ライトを引き寄せ、他のアストラル ライトをしりぞける。

清らかな善良な魂は、清らかな善良なアストラル ライトを引き寄せ、悪く汚染されたアストラル ライトをしりぞける。

そのため、清らかな善良な魂にとってはアストラル ボディは天国と成る。

汚れた悪い魂は、悪く汚染されたアストラル ライトを引き寄せ、清らかな善良なアストラル ライトをしりぞける。

そのため、汚れた悪い魂にとってはアストラル ボディは文字通り地獄と成る。

「マタイによる福音」の第 22 章の例え話で「礼服」を着ていない人が神の外の暗闇、神の心の外の暗闇、「神の王国」の外の暗闇に放り出されたが、正しい行動を蓄積した正しいアストラル ボディを魂の衣服として纏(まと)っていなかった悪人だからである。

呼吸するように正反対に交互にアストラル ライトに働きかける必要が有る。

冷たさと暖かさを交互に感じる時はアストラル ライトが連続して流れている。

神の聖霊の魔術師は、神の聖霊によって、奇跡を起こす。

神の聖霊は、アストラル ライトによって、この世で奇跡を起こす。

悪人の霊の魔術師は、アストラル ライトによって見聞(みき)きしたり、アストラル ライトを暴走させて異常現象を起こす。

悪人の霊のアストラル ボディは太陽光とつながっているアストラル ライトに燃やされ溶かされて、悪人の霊は苦痛を感じるので、太陽光から悪人の霊は逃れようとする。

機械による光もアストラル ライトとつながっている。

悪人の霊は、類似の欠点を通じて、他人の肉体やアストラル ボディにニュルっと入り込んで、太陽光から一時的に逃れる事が有る。

悪く汚染されたアストラル ライトは、冷えると、外部は硬く、内部は肉のようにブヨブヨした、汚い黒い蝋燭(ロウソク)の蝋(ロウ)のような物に変わる。

アストラル ライトをダイアモンドより硬いアストラル クリスタル(星の結晶)に結晶化できる。

目、親指、手のひら、喉(のど)はアストラル ライトを放射しやすく引き寄せやすい。

「上の者は下のものを自由にできる」という魔術の原理によって反作用を無効化できる。

また、正しい知者は呪いをはね返す。

アストラル ライトは、存在性、唯一性、統一性によって、液体のように、全ての物に浸透（しんとう）する。

肉体といった物質はアストラル ライトの引き寄せと放射のバランスで創造されている。

アストラル ライトを満たすのが多過ぎたり速過ぎたりすると、肉体や物質を破壊してしまう。

アストラル ライトを引き寄せ過ぎたり放射し過ぎると、脳を含む神経の病気に成ってしまう。

奇跡を起こすには神の様な者に成る必要が有る。

男性神は超神である。

奇跡を起こすには超人に成る必要が有る。

神の聖霊の魔術師は神の模倣者（もほうしゃ）である、と言える。

肉欲を超越した超人だけがアストラル ライトを凝固できる。

神の楽園の隣に、いきなり、この世が存在するわけではない。

神の楽園と、この世の、中間世界である、霊の冥界が存在する。

神の世界にも太陽といった星が存在する。

太陽の姿の絶対神が存在する。

絶対神である太陽神が存在する。

冥界にも太陽が存在する。

男性神が男性神の中で太陽神を理解したものが存在する。

したがって、冥界の太陽は男性神と太陽神の性質を帯びる。

冥界の太陽は五芒星を象(かたど)っている男性神の体の光を放つ。

冥界の太陽は概念を言葉で放つ。

冥界の太陽は、この世の太陽の元と成っている。

そのため、アストラル ライトと太陽光はつながっている。

五芒星を象(かたど)っている男性神の体の光、アストラル ライト、太陽光、機械による光は五芒星とつながっている。

冥界の太陽の光は、冥界の下層に行くにつれて、この世に近づくにつれて、劣化して、アストラル ライトに成る。

男性神の体の光は、冥界の上層で気体に成り、冥界の下層と、この世で、液体に成る、と言える。

この世の物は固体である、と言える。

アストラル ライトは液体である、と言える。

血は肉体の液体である、と言える。

そのため、血はアストラル ライトとつながっている。

霊化している血がアストラル ボディを構成している。

血の文字がパンや紙に浮かぶ異常現象はアストラル ボディの霊化している血が物質化した物である。

悪人の霊が、死体やアストラル ボディを維持するために、類似の欠点を通じて、他人のアストラル ボディから霊化している血を奪う時が有る。

「エメラルド板」には「太陽は父である。月は母である。風は腹に抱く。地は保母である」と記されている。

月は、太陽光を反射して、太陽光とつながっているアストラル ライトに感化を与える。

星はアストラル ライトに感化を与える。

水星、金星、火星、木星、土星といった惑星はアストラル ライトに感化を与える。

　ところで、数５の力の女神と数４の知の女神は双子の姉妹のような者たちである。

　太陽光とつながっている五芒星は数５の形である。

　数４の女神は月を司っている。

　だから、太陽と月は象徴的に対（つい）である。

　それで、太陽は厳しさを表し、月は思いやりを表す、と言われている。

　ただし、数５の力の女神は良い意味で大らかさと厳しさを持っているし、数４の知の女神は良い意味で思いやりと冷たさを持っている。

　ちなみに、数３の円から数４の球を経て数５の回転へ幾何学的（きかがくてき）に向上するので、また、数３の固体から数４の液体を経て数５の気体へ向上するので、数３の女神と数４の女神と数５の女神は三姉妹のような者たちである。

さて、「魔術の歴史」の第７巻の第４章で19世紀の魔術師エリファス レヴィは「アストラル ライトによる幻の体は金属の先端の作用によって分解される」と話している。

どういう論理で金属の先端、金属の端（エッジ）、金属の刃は「アストラル ライトによる幻の体」、「アストラル ボディ」を分解できるのか？

金属は固体の中の固体、固体の精髄である。

固体の数は３である。

端（エッジ）、刃の数は２である。

金属の刃の数は３＋２＝５である。

ちなみに、細胞に固い細胞壁が有る植物の数は３である。

そのため、木製の矢といった尖らせた木の先端の数は５である。

数５の概念、数５の形である五芒星、五芒星を象（かたど）っている男性神の体の光、アストラル ライト、太陽光、たいまつやロウソクなどの光、機械による光、金属の刃、木製の矢はつながっている。

アストラル ライトは汚れたアストラル ライト、汚れたアストラル ボディを分解する。

そのため、五芒星、アストラル ライト、太陽光、たいまつやロウソクなどの光、機械による光、金属の刃、木製の矢、火、強風、香は汚れたアストラル ライト、汚れたアストラル ボディを分解する。

「隠された学問について(魔術について)(三部作)」の第１部の第５章で 16 世紀の魔術師コルネリウス アグリッパは「賢明な宗教は悪霊を追い払うために贖罪の儀式をして埋葬するまで死者の遺体のそばで光や火を灯すべきであると定めている」と話しているが、光や火が悪人の霊の汚れたアストラル ボディを分解するからである。

西洋の魔術の降霊術の儀式では霊を脅すために降霊術師は手に剣を持つべきであるそうだが、金属の刃が悪人の霊の汚れたアストラル ボディを分解するからである。

古代の日本人は金属の刀剣や弓矢を魔除けとしていたが、金属の刃、金属の鏃（やじり）、木製の矢が悪人の霊の汚れたアストラル ボディを分解するからである。

病人の近くに置いたら病人の病気が治ったという逸話を持つ刀剣が存在するが、その病気が汚れたアストラル ライトによる物だとしたら、金属の刃が汚れたアストラル ライトを分解するからである。

肉体の死後

　肉体が死ぬ時は、両目の視界が一瞬で真っ暗に成る。

　古いアストラル ボディだけをまとった状態は７日間、続く。

　古いアストラル ボディは液体である、と言える。
　悪人の古いアストラル ボディは、固体の一歩手前の、液体である、と言える。

　肉体の死後、アストラル ライトによって、７日間かけて徐々に、古いアストラル ボディは、魂に対応した、新しいアストラル ボディに変わる。

　正しい人の霊は忘れない。
　悪人の霊は学力といった才能と記憶を失っていく。

　悪人の霊は肉体を復活させようと試みる。
　悪人の霊は死体や墓の近くを浮遊する場合が有る。

　悪人の霊は肉欲にとらわれている。
　悪人の霊は悪夢を異性に見させる場合が有る。
　悪人の霊は、生前、楽しく過ごした場所を浮遊する場合が有る。
　悪人の霊は所有していた宝や隠した宝に執着する場合が有る。

正しい人の新しいアストラル ボディは気体である、と言える。

悪人ではないが正しいわけでもない人の新しいアストラル ボディは液体のままである、と言える。

悪人の新しいアストラル ボディは固体である、と言える。

新しいアストラル ボディだけをまとった状態も７日間、続く。

アストラル ライトは、概念が言葉で書かれ、形が映像で描かれている、神の書である、と言える。

肉体とのつながりが全く無い、新しいアストラル ボディだけをまとった状態では、アストラル ライトに蓄えられている映像と言葉を自由に見聞（みき）きできる。

肉体の死後、14 日間が経つと、正しい人は９つの天（ヘブン）に入る。

肉体の死後、14 日間が経ってから、善行の報いが尽きると、悪人ではないが正しいわけでもない人は、別の肉体をまとって、生まれ変わる。

肉体の死後、14 日間が経つと、悪人は新しいアストラル ボディが地獄と成る。

正しい人の魂は、アストラル ボディを大気中のアストラル ライトの中に残す、と言える。

13番目のタロットの大アルカナは「死」である。

14番目のタロットの大アルカナには、一方の器（うつわ）から他方の器（うつわ）へ液体を注ぐ天使が描かれている。

14番目のタロットの絵は、肉体の死後の14日間を想起させる。

四大元素の霊と妖精とドワーフと竜

　四大元素の霊は不完全な人の霊である。

　四大元素の霊は四大元素（エレメント）のうち１つの元素（エレメント）にとらわれている。

　土の頑固、水の優柔不断、火の短気、風の気まぐれ、といったように、悪徳を四大元素（エレメント）に分類できる。

　神が四大元素の霊を創造している。

　四大元素の霊は幼子のような者である。

　四大元素の霊は無邪気であるが正しい者ではない。

　幼子の無知による脆弱（ぜいじゃく）な無邪気と、賢者や聖者という真の大人の知っていても綺麗（きれい）な真の清らかさは、異なる。

　四大元素の霊の思考は不完全である。

　四大元素の霊は、四大元素の霊を困らせる人を困らせる。

　ただし、肉体をまとわないで神の聖霊にまで向上する四大元素の霊が存在する。

　妖精は神の聖霊に近い四大元素の霊である。

ドワーフは善良なノームである。

ノームは土の元素（エレメント）の霊である。

口伝では、ドワーフは「最初の巨人」の死体の肉である大地から生じて土の中に住んでいる。

ドワーフは神と相対（あいたい）する存在である。

ドワーフは神の武器などを作れる。

人は神を巨人のような無限の人として理解している。

ドワーフは土の元素（エレメント）の霊である。

人は神と相対（あいたい）する存在である。

ドワーフは人の霊である、と言える。

土の元素（エレメント）の魔術は、物質化の魔術であり、不思議な武器などを作れる。

口伝では、ドワーフとは神が人に似た姿と知性を蛆（うじ）に与えた者である。

マルコによる福音9章48節には「地獄の蛆（うじ）は死なない」と記されている。

アストラル ライトは、悪人の霊のアストラル ボディを溶解するので、蛆（うじ）に例（たと）えられている。

ドワーフとは神が人に似た姿と知性をアストラル ライトに与えた者である、と言える。

竜は魚類と爬虫類（はちゅうるい）といった鱗（うろこ）を持つ者たちの神である。

竜は水神である、と言える。

アストラル ライトは液体である、と言える。

竜は、水神として、アストラル ライトに大きな感化を与える。

悪く汚染されたアストラル ライトは地を這（は）う。

蛇といった爬虫類（はちゅうるい）は地を這（は）う。

悪く汚染されたアストラル ライトを蛇や竜に例（たと）える事が有る。

人の罪への天罰である巨大な奇形な爬虫類（はちゅうるい）が現れて人々を襲ったが討たれた、という伝説が多く残されている。

例えば、フランスのヴイーヴルとも呼ばれるワイバーン、グラウリ、ガーゴイル、タラスクである。

古代ギリシャでは、天罰の偽竜を討ったりした英雄を、罪のつぐないをして人を神と和解させた者、人と神の仲介者、神の子と見なし、王にしたりした。

そのため、古代ギリシャの大衆は、神（ゼウス）をあちこちで神の子を作った浮気者と誤解してしまった。

男性神は、天女といった正しい者から、悪人といった悪い者へ、徐々に、被造物を創造した。

第１の者、「この世」を無意識に破壊してしまうほど正しい者は、霊の冥界の９つの天（ヘブン）に留まっている、天女などである。

古代には、天女などは、この世に、堕天というか、降臨というか、化生（けしょう）として「この世」にあらわれる事が有った。

第２の者、正しい人、大いなる人が、古代の、賢者、聖者や聖女である。

第３の者、悪人ではないが正しいわけでもない人たちが「この世」に増え始めた時に、男性神が、人に成って、悔（く）い改めるように人々に教えて、身代わりに成って、殺された。

第４の者、生まれた時点では悪人である者が、現代人である。

ただし、少し混ぜてあるので、古代にも悪人はいたし、現代にも善人はいる。

　賢者、聖者、聖女は７歳で心が目覚める事が多い。

　心が目覚める人は４つに分けられる、かもしれない。

　心が７歳で目覚める人

　心が 15 歳で目覚め始め 30 歳で目覚める人

　心が 15 歳で目覚め始め 60 歳で目覚める人

　心が一生の間では目覚めない人

　心が 15 歳で目覚め始め 30 歳で目覚める人は、男性神の身代わりの一翼(いちよく)を担(にな)って、勉強ができなかったり、生きるのが下手だったり、病気だったり、体が不自由だったり、貧しかったり、身分が低かったりして、苦労する事が多い。

　心が 15 歳で目覚め始め 60 歳で目覚める人は極稀(ごくまれ)である。

　そのため、侮(あなど)らないで７歳の人からも教わり、侮(あなど)らないで 60 歳の人にも教える必要が有る。

魔術

魔術は、6つに分けられる。

1 強化の魔術

2 変化の魔術

3 土の元素（エレメント）の魔術 物質化

4 水の元素（エレメント）の魔術 引き寄せる

5 火の元素（エレメント）の魔術 放射 しりぞける

6 風の元素（エレメント）の魔術 霊化

この世の人の魔術は、4つに分けられる。

神の聖霊による魔術

四大元素の霊による魔術

アストラル ライトによる魔術

悪人の霊による魔術

魔術は神の奇跡の模倣（もほう）である、と言える。

魔術師は神の模倣者である、と言える。

神の聖霊と四大元素の霊は、アストラル ライトによって、超常現象を起こす。

悪人の霊は、アストラル ライトによって見聞（みき）きしたり、アストラル ライトを悪意で暴走させて、異常現象を起こす。

「力」が有れば、「神のような者」に成った時に、「神の聖霊による魔術」を使う事ができる。

「力」とは心の力である。

この世の人は「力」が制限されているので、この世の人には、「力」の各種における有無や、「力」の優劣が有る。

「神の聖霊の魔術師」は神の聖霊が確信を与えてくれている種類の魔術を使う事ができる。

「神の聖霊の魔術師」は確信が有る魔術を使う事ができる。

「神の聖霊の魔術師」は、徳を積（つ）めば、使う事ができる魔術の種類が増える時が有る。

自分の心を清めるか、他者を思いやれば、徳を積（つ）める。

神の強化、「神の聖霊による魔術」の「強化の魔術」は、「力」による強化なので無限に強化できる。

「アストラル ライトによる魔術」の「強化の魔術」は、アストラル ライトを肉体や物質に満たして強化するため、アストラル ライトを満たすのが多過ぎたり速過ぎたりすると肉体や物質を破壊してしまうので、限界が有る。

神である神の聖霊には限界は無いので、「神の聖霊による魔術」には限界は無い。

「上の者は下のものを自由にできる」という魔術の原理によって、「力」が有れば、四大元素（エレメント）の徳で四大元素の霊を圧倒している時に、「四大元素の霊による魔術」を使う事ができる。

例えば、「力」が有れば、思いやりといった水の徳で水の元素（エレメント）の霊ウンディーネを圧倒している時に、水の元素（エレメント）の霊ウンディーネによる魔術を使う事ができる。

土の頑固、水の優柔不断、火の短気、風の気まぐれ、といったように、悪徳を四大元素（エレメント）に分類できる。

逆に、徳も四大元素（エレメント）に分類できる。

「力」が有れば、「アストラル ライトによる魔術」を使う事ができる。

アストラル ライトを引き寄せ過ぎたり放射し過ぎると、アストラル ライトの循環の流れが停滞してしまうので、「アストラル ライトによる魔術」には限界が有る。

アストラル ライトを引き寄せ過ぎたり放射し過ぎると、脳を含む神経の病気に成ってしまう。

「土の元素（エレメント）の魔術」は、緑色や黒色の冷たいアストラル ライトである。
「水の元素（エレメント）の魔術」は、青色や白色や銀色の冷たいアストラル ライトである。
「火の元素（エレメント）の魔術」は、赤色や黄色や金色の暖かいアストラル ライトである。
「風の元素（エレメント）の魔術」は、紫色の暖かいアストラル ライトである。

冷たさと暖かさを交互に感じる時は、アストラル ライトが連続して流れているので、魔術が成功している。

「上の者は下のものを自由にできる」という魔術の原理によって、正しい人のアストラル ライトが見えなく成るように正しい人が望めば、悪人には正しい人のアストラル ライトが見えなく成る。

呼吸するように正反対に交互にアストラル ライトに働きかける必要が有る。

「土の元素(エレメント)の魔術」と「風の元素(エレメント)の魔術」を交互に使う必要が有る。
「水の元素(エレメント)の魔術」と「火の元素(エレメント)の魔術」を交互に使う必要が有る。

正反対に交互にアストラル ライトに働きかけないと、アストラル ライトを引き寄せ過ぎたり放射し過ぎてしまうため、アストラル ライトの循環の流れが停滞してしまうので、「アストラル ライトによる魔術」を一時的に使う事ができなく成ってしまう。

正しい思考、正しい想像、神の知や善の知は「力」を強める。

呪文といった言葉、身振りといった行動、魔法陣といった形は思考と想像を強める。

「力」は距離に比例して減衰する。

「力」は、
素手、
剣といった近距離武器、
槍といった中距離武器、
弓といった遠距離武器、または、絶対神のうち機械神の体の一部の銃火器、
雷といった遠隔攻撃、
機械神の体の一部ではない銃火器、
体や物に直接働きかける直接攻撃、
という順序で減衰する、と思われる。

機械神は、この世のメタリックな機械的な昆虫の元に成った神である。

「知る事は存在させる事である、と言える」という魔術の原理によって、知覚しているほど、強化しやすい。
機械神は、知覚力が優（すぐ）れているので、弾（たま）などを強化できる、のかもしれない。
神話では、月の女神は弓矢を武器とする。
月の女神は、数４の知の女神である。
数４の月と知の女神は、知覚力が優（すぐ）れているので、矢を強化できる。

「知る事は所有する事である、と言える」という魔術の原理によって、他人のアストラル ライトには干渉し難い。

アストラル ライトの循環の流れの輪を作れば、魔術の威力が強まる。

心を１つにすれば、アストラル ライトの循環の流れの輪を作れる。

心を１つにする者の数は奇数の方が良い。

心を１つにする者の数は３人が最も良い。

神殿や教会で祈れば、願いが叶う可能性が高く成る。

癒（いや）しの魔術は「強化の魔術」である。

水を赤ワインにする魔術と、錬金術は「変化の魔術」である。

出エジプト記 16 章の糧マナを作る魔術は「土の元素（エレメント）の魔術」、物質化の魔術である。

過去や遠隔地を視る魔術は「水の元素（エレメント）の魔術」である。

雷の魔術、火の魔術、見た者を麻痺させる魔術は「火の元素（エレメント）の魔術」である。

四大元素の霊や悪人の霊を追い払う魔術、空中浮揚の魔術は「風の元素（エレメント）の魔術」、霊化の魔術である。

「見ると見られる」という魔術の原理によって、遠隔地の者を視る魔術は相手に気づかれる可能性が有る。

「上の者は下のものを自由にできる」という魔術の原理によって、遠隔地の者を視る魔術で相手に気づかれないようにできる。

男性神の魔術は、無によって消滅させる魔術、身代わりに成る魔術、自己犠牲によって「力」を強める魔術などである。

女神たちの魔術は、存在という根を断ち切り存在できなくさせて消滅させる魔術、存在という根をおさえて操作する魔術などである。

堕天は「水の元素（エレメント）の魔術」と「変化の魔術」と「土の元素（エレメント）の魔術」による下降である、と言える。

4 水の元素（エレメント）の魔術

2 変化の魔術

3 土の元素（エレメント）の魔術

堕天が「水の元素（エレメント）の魔術」と「変化の魔術」と「土の元素（エレメント）の魔術」による下降であるのは、「朝は４本足、昼は２本足、夜は３本足の動物は何か？」というスフィンクスの謎の鍵の１つである、かもしれない。

男性神が堕天で創世している影響で、魚は腐敗が速く独特の臭みが有り、虫といった無脊椎動物（むせきついどうぶつ）は不快な姿形である、かもしれない。

4 魚

2 昆虫以外の虫といった無脊椎動物（むせきついどうぶつ）

3 昆虫

一部の絶対神は５つに分けられる、かもしれない。

1 太陽神といった星が体である絶対神

2 ぬいぐるみのような簡略化（デフォルメ）されたような体の絶対神

3 宝石が体である絶対神 機械神 植物が体である樹神

4 竜 犬の神 狼（オオカミ）の神 イルカの神

5 猫（ネコ）の神 ライオンの神 鳥の神

古事記と日本書紀の三位一体

大己貴（オオナムチ）または大国主（オオクニヌシ）、少彦名（スクナビコナ）、三輪山の大物主（オオモノヌシ）は古事記と日本書紀の三位一体である。

1人称（にんしょう）は己（おのれ）である。
大己貴（オオナムチ）には己（おのれ）という文字が有る。

数1は数2より少ない。
数2で多い少ないという概念が表れる。
少彦名（スクナビコナ）は数2の中の数1である。
そのため、少彦名（スクナビコナ）は大己貴（オオナムチ）または大国主（オオクニヌシ）である、と言える。

日本書紀で三輪山の大物主（オオモノヌシ）は大国主の幸魂（さきみたま）、奇魂（くしみたま）であると話している。
輪を特定するには3つの座標が必要である。

残念ながら、日本の神道（しんとう）は、古事記と日本書紀の象徴的な神話以外、具体的な教えなどが失われてしまった。